

監督業の幸福論 (the happiness of coaches)

1K07B065-0

指導教員 主査 武藤泰明先生

菊池 亮

副査 作野誠一先生

【主題・目的】

監督業における幸福とはいったい何なのか——。それを当論文の主題とし、スポーツにおける監督、中でも今回はサッカー監督、(2010年12月現在)前日本代表監督岡田武史氏とA代表の2010年度の軌跡に特に焦点を当てながら、その主題に稚拙ながら自分なりの仮説を立てることを試みる。

また、主題の扱う領域のその広大さのために、その検証においてはまったくの不完全となっており、つまりはこの論文そのものが当主題における提起、叩き台の提供となるものと捉えていることを此処に記述しておく。

【テーマ選定理由】

2010年、サッカーワールドカップ南アフリカ大会が開催された今年、日本代表をベスト16に導いた立役者、岡田武史監督。

2007年の12月に脳梗塞で倒れたオシム監督に代わり代表監督を引き継いだ彼は、1998年のフランス大会でも予選でチーム不調を理由に更迭された加茂監督に代わって監督を務めるといふ、いわゆる「その場しのぎの急造代理監督」といったような(決して良好とは言えない)状態でのチーム指揮が多く、そのためかいささかな逆境に立たされる傾向にある。

そして大会開催直前6試合でも1勝5敗、うち韓国とは二回戦い二回とも負けるというチーム不調の非常事態において、やはり彼はその原因の矢面に真っ先に立たされた。

各種メディア、評論、はたまたサポーターからの逆風の中(W杯後に評価は覆されるわけだが)、監督を行っていることにおける楽しさや「いいこと」とは一体何なのか? そもそも存在などしているのだろうか? 素朴にもそんな疑問がわき上がってきたことが、何よりの当テーマの選定動機となった。

【構成】

《序論→チーム①・チーム②→終論》

という、上記の流れで「監督業における幸福とはいったい何なのか」というテーマに対し、情報の整理、考察、仮説立て、検証を——あるいは新たに問題・事象が発生した場合は、出来る限りの範囲を持ってそれらに取組むこととする——行っていく。

具体的には以下の要領で行っていく。

《序論》W杯前の岡田 JAPAN について
《チーム全体》

「監督業の幸福論」を、「監督(業)」と「幸福(論)」のふたつに分け、それぞれのチームにて情報の処理を行っていく中で、仮説(主題への答え)を導いていく。

仮説:『監督が自分なりに見極めた勝負の本質を、自分なりの方法で達成すること』

チーム①: 監督(業)とは何か?

・監督概要(ステイクホルダー)・歴代監督事例(日本代表・アルゼンチン代表・ヴィッセル神戸・名古屋グランパス・マンチェスターユナイテッドFC・モウリーニョ)・考察その①: 監督が達成すべき「成果」とは?・考察その②: 勝利とは? 勝利するとは?(監督における勝利について)

「監督は、監督でない監督ではない」と、当然ながらもその重要な前提を基にして、監督が監督であるための手段を模索する。さまざまな歴代監督の事例から、監督は「成果」を達成することで監督を続けられるという事実を導き出し、「成果」の内実がいったい何なのかを探る。そしてその結果、達成すべき「成果」というものが、クラブにおけるステイクホルダーの数だけ存在することが分かった。

チーム②: 幸福(論)とは何か?

・幸福概要・幸福事例: 国民総幸福量(GNH)・監督(業)における幸福論とは?(ボーナスストラック: モウリーニョ監督)

「勝つこと=幸福」または「負けること=不幸」それならば「監督が勝つこと」はいったいどうなる?

《終論》W杯後の岡田監督、日本代表

「自分なりの戦い方」を見失っていた岡田監督は今回の仮説に当てはめると不幸になるのではないだろうか。まさに、場当たりの勝敗に一喜一憂し、他者の価値に振り回されて、消耗していった感がある。

(了)